私のテーマ

北海道開拓に夢かけた土佐の先人たち

椿原　庸夫

はじめに

「龍馬の夢―北海道開拓」は叶わなかったが、後に北海道開拓判官・初代北海道庁長官の岩村通俊、龍馬の甥・坂本直寛、直寛の自由民権運動の同志・武市安哉など、多くの土佐人が北海道の礎を築いた。移住者は5、813戸（明治14年～昭和10年）、屯田兵（平時は農業、戦時は軍隊）として3、642戸（明治24年～32年）が参加した。北海道は今、「日本の食料基地」「国際的な観光地」として花開いているが、その視点から、土佐の先人たちを取り上げたい。

土佐ボーイ

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の名言を残したクラーク博士は、札幌農学校（北大の前身）の教頭として人材養成に当たったが、クラークが「土佐ボーイ」と呼び、その素朴な気質を愛した一期生3人がいた。

（北海道大学附属図書館所蔵）

札幌に於けるクラーク先生

黒岩四方之進

クラークは、「自然を科学的に観察すること」を重視した。明治10年（1877）1月30日、極寒の中、一期生16人が札幌の手稲山登山を実施。巨木の珍しいコケを採取するため、クラークが背の高い黒岩を指名。長靴を脱いで恩師の背に乗ろうとすると、そのままで良いと。

クラークの寛容な心に胸打たれた黒岩は、後にクラークが「イエスを信ずる者の誓約」を起草し、生徒に署名を求めた際、一番に署名した。卒業後、日高国新冠御料牧場長として20数年間勤め、畜産界に大きな足跡を残した。退官後、十勝国直別に一大農場を開き、「直別の聖人」と慕われた。

内田瀞

内田は一期生の中でも、特に北海道の開拓行政と北海道農業確立のために献身的な生涯を送った代表者と言われる。卒業後、殖民地選定主任として、開拓の基本となる土地選定、区画割を成し遂げた。また、牛・緬羊の飼育を推進するなど混同農業を実践し、今日の「米どころ上川穀倉地帯」の基盤を築いた。遺言により遺骨は鷹栖町に埋められ、お墓もある。クラークの帰国後も文通しており、その私信が残されている。

田内捨六

農学校時代、夏休みの40日間、内田らと石狩川探検の資源の調査へ。明治14年、開拓使の調査官として内田らと90日間の東北海道調査を行い、翌年には人跡未踏の十勝平野に入り、入植したばかりの依田勉三（十勝開拓の父）らへ助言を与えた。九州天草から200戸の移民を計画したりしたが、志半ばで倒れた。

1878年7月30日撮影　左から、内田瀞、黒岩四方之助、田内捨六　（北海道立総合博物館所蔵）

札幌農学校時代、調査旅行姿の『土佐ボーイ』たち。

〈漁業〉広井勇

札幌農学校2期生で、クラーク精神を受け継ぐ近代築港学、橋梁学の祖。

後に、札幌農学校教授を経て東京帝国大学教授。北海道庁技師を兼ね、今は一大観光地として知られる小樽運河をはじめ、函館、室蘭、釧路など各港の基盤を築いた。小樽の公園には銅像がある。

〈農業〉川田竜吉・男爵

実業家であった川田は、1906年、函館ドッグ再建のため専務取締役に就任。同年、七飯町の農地を購入し、イギリスから数種類輸入した馬鈴薯の中からアイリッシュ・コブラーを「男爵いも」として栽培した。現在、じゃがいも生産の8割は北海道だが、作付面積が最も多い品種は「男爵いも」だ。

〈観光〉大町桂月

文人・桂月の「富士山に登って、山岳の高さを語れ。大雪山に登って、山岳の大きさを語れ」と言う言葉は有名。1923年、桂月の紀行文「層雲峡より大雪山」が中央公論で発表され、大雪山が一躍有名になった。道内各地に記念碑・歌碑があり、北海道観光における桂月の功績は大きい。

土佐と北海道の固い絆、さらに

高知の「よさこい祭り」に感動した北大の学生が発案した「YOSAKOIソーラン祭り」。今や国内外、約270チーム27、000人が参加し、200万人以上の観客が札幌に集う一大イベントだ。姉妹都市・友好都市、姉妹町が7つあり、固い絆で結ばれている。

結び

50年前、「北海道開拓100年事業」の「アメリカ大陸横断の旅」（35日間）に参加し、クラーク博士のお墓に献花礼拝してきたが、北海道開拓に夢をかけた土佐の先人たちをはじめ、全ての人たちに「屯田兵3世」の一人として、心から感謝の意を表したい。

◎参考文献―札幌農学校（図書出版社）、W・S・クラーク（北海道大学出版会）、土佐史談191号（土佐史談会）

第13回高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会

テーマ「龍馬の思想と行動」

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は5月22日、坂本龍馬記念館ホールにおいて第13回総会・研究発表会を開催した。

昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止を余儀なくされたが、今年も引き続きその影響を受けながらも、規模を縮小し、大きく形を変えることにより開催の運びとなった。高知県教育長伊藤博明様・高知市教育長山本正篤様から祝辞をいただいたが、来賓としての来場は叶わず、書面での披露となった。総会における審議については昨年度の第12回に引き続き書面議決とし、その結果が会場において報告された。昨年中止となった研究発表会は予定通り5名の講演・発表がおこなわれたが、県内在住の1名を除き、オンラインでの講演・発表となった。内容については、以下に概要を示すとともに、後日発行の『論集』にも当日の講演・発表内容を元にした論考を掲載する予定である。

例年と同じ会場を設けながら、ほとんどがスクリーン越しという特殊な開催形態となった。学会運営の新たな可能性を感じつつ、来年は通常開催できることを期待しての「宣言」の発表となった。

宣　言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、平成二十一年四月の発足から十二年が経過した。昨年は涙をのんで中止となったが、今年はコロナ禍にも負けず、リモート発表という方式も含めて開催の道を選んだ。第十三回研究発表会である。テーマは「龍馬の思想と行動」。社会のさまざまな場面で閉塞感が漂う中、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

講演は日本芸術文化振興会監事の大石学さん。演題は「坂本龍馬の現代的意義」。他に県内外の四人の研究家が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。

坂本龍馬記念館の充実とともに、県下至る所で龍馬の掲示が見られるようになってきた。ただ、子どもたちにどれくらい龍馬のことが正しく届いているのだろうか。龍馬が逝って一五四年。廃藩置県から一五〇年。私たちは龍馬らの生きた激動と変革の時代に学びつつ、子どもたちにも龍馬の生き方を語りながら、悔いのない道を確実に歩んでいきたいと思う。

二〇二二年五月二十二日

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

特別講演　※オンライン

坂本龍馬の現代的意義
—モデル喪失と創出の時代を迎えて—

日本芸術文化振興会監事
東京学芸大学名誉教授
大石 学

大河ドラマ「龍馬伝」をはじめ、幕末期の歴史を扱った映像作品の多くに、時代考証の立場で関わってきた経験から、龍馬の思想と行動の現代的意義を論じた。

最大の意義は、龍馬のキャラクターの魅力、特に人生を通じた思想的成長が見られる点である。千頭清臣『坂本龍馬』にある〝長刀から短刀へ、刀からピストルへ、ピストルから万国公法へ〟のエピソードはフィクションだが、その一部は龍馬の書状の内容に基づいており、龍馬の視野・立場、そして価値観の広がりを象徴する話としてとらえることができる。龍馬の成長過程は、まず「土佐人」としてペリー来航に遭遇するなど「草莽の士」の一人として始まり、次に久坂玄瑞・勝海舟等との出会いを経て「日本人」としての活動に従事するなかで反幕府勢力の結集に役割を果たし、また亀山社中・海援隊での活動を通じて「国際人」としての片鱗を見せた。

海援隊約規にも、龍馬の独自性が垣間見える。約規には、自由意志による参加、組織概要と藩支援の安定性、組織統治（コーポレイト・ガバナンス）、遵法（コンプライアンス）、組織内教育、ベンチャープランの奨励、が謳われており、これは近代企業精神に通じる先駆的な内容である。これと比較して同時代の他の組織の綱領・規約をみれば、土佐勤王党「盟約文」は理念的・抽象的、新選組「局中法度」は理念的・精神的で、海援隊約規との差は大きい。高杉晋作による「奇兵隊結成綱領」は平等主義や業績主義など先進性も見られるが、あくまで非常時における軍事組織の規律である。

グローバル化や新型コロナウイルスのパンデミック拡大が進むなか、自国優先主義や地域間格差・対立が顕在化する今日、坂本龍馬の思想と行動の検討は重要性を増している。〝or、exclusion（排除による均質化）〟ではなく〝and、inclusion（包摂による多様化）〟の精神とともに、龍馬に典型される日本型・江戸型モデルを再認識し、それを世界・未来へ発信することの意義が問われている。

研究発表

海南政典の「藩政機構」改革と石尾芳久氏のウェーバー「官僚制論」に依拠した分析

※オンライン

鹿児島県立短期大学
名誉教授（吉田本家末裔）
網屋　喜行

土佐法制史における重要法典のひとつに数えられる海南政典について、海南政典研究の第一人者である石尾芳久氏の研究における分析手法を紹介する形で、その内容と意義を論じた。

海南政典は、山内容堂の意をうけて吉田東洋が編纂した法規で、文久元（1861）年に脱稿、翌年「職守」篇が実施された。吉田東洋の目的は、海南政典によって「藩政機構」を「合理的官僚制」化することで、その官僚制改革の柱は、第一が人材抜擢の制度化、第二が近習・外官の兼任の禁止（藩政と家政の分離）であった。

石尾氏の研究の特徴は、海南政典が官僚の「近習・外官」峻別制をとった点を重視したことである。そして、その意義をウェーバー著「官僚制論」の論理を用いて明らかにしたことに独自性が認められる。

コロタイプ技術で龍馬の手紙を複製する
～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～

※オンライン

株式会社便利堂
コロタイプ研究所所長
山本　修

入社以来40年携わってきた自身の経験に基づき、コロタイプという印刷技術の特徴と意義を論じた。

ゼラチンを版に用いるコロタイプの特性として、本来モノクロ写真の印刷技術であること、印刷物の拡大表示に強みを持つこと、耐久性に優れること、大量印刷に向かないこと、手間とコストが掛かることなどがあげられ、メリット・デメリットがはっきりしている。現代においては、カラー化を実現したことで、文化財の複製や復元にその特性が活かされている。

印刷までの具体的な過程を、昨年度高知県立坂本龍馬記念館に納品した龍馬書簡の複製制作を事例として、映像にまとめて提示した。撮影・製版・校正・印刷という一連の工程に、職人の熟練の技術が生かされていることを紹介した。

明智光秀と龍馬

※オンライン

国立大学法人愛媛大学
社会連携推進機構教授
坂本世津夫

明智光秀に「謀反人」というレッテルが貼られたためか、明智光秀と土佐との関係が論じられる機会は少ない。この課題を解消する一助とするため、時代を超えた繋がりがあると考える明智光秀と坂本龍馬との関係について、私見を述べた。

かつて坂本城があった地（高知県南国市亀岩）には、近年の墓石ではあるが、坂本家の先祖が明智左馬之助（光春）である旨が書かれた墓もある。坂本龍馬の先祖にあたる坂本太郎五郎の墓は、亀岩の隣の谷である才谷にある。研究手法として仮説を立てることの重要性を指摘し、このような口伝や伝承等を根拠に、坂本太郎五郎は明智光秀の実子ではないか、等の新たな仮説を提示した。

『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える
―龍馬の精神風土と皇国への思い

高知県立坂本龍馬記念館
学芸課長
前田由紀枝

坂本家に根付いた歌詠みの風土を紹介し、それが龍馬に与えた影響を考察した。

坂本家には、龍馬の曽祖父である井上好春から続いた歌人としての系譜があり、生真面目な歌風としてそれは龍馬にも受け継がれた。龍馬の書簡からは、龍馬に和歌を含む古典についての浅くない知識があったこと、また花鳥風月に人一倍の関心があったことが読み取れる。

これをふまえ、南北朝時代の南朝の人物の歌を集めた『新葉和歌集』が注目される。龍馬がそれを南朝へ思いを致すための座右の書と位置づけようとしていたこと、幕末の志士を鼓舞する目的で『新葉和歌集』を復刻出版した松浦武四郎との「皇国」観を介した繋がりがうかがえること等、龍馬の「志」を分析するために重視すべき要素である。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
第13回総会書面議決のご報告

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2021年度の事業計画や予算等の総会審議事項については、事前に書面議決を行いました。その結果は次の通りです。

会員数　120名
第1号議案（1）（2）（3）
承認67名　不承認0名　回答なし53名
第2号議案（1）（2）
承認67名　不承認0名　回答なし53名
第3号議案
承認67名　不承認0名　回答なし53名
以上により規約第9条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
会長　宮　英司

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十六）―

ええじゃないか！

宮川　禎一

最近、書店で『新・もう一度読む山川の日本史』を手に取って、幕末史のあたりをパラパラ見ていたら京都国立博物館所蔵の『近世珍話』というマイナーな絵巻の中の「ええじゃないか」の図が掲載されていて驚いた。筆者がよく龍馬展で展示してきたので図録にも掲載したものだが、高校の歴史教科書に採用されていたとは…。調べてみると、以前は江戸時代後期の錦絵にある伊勢御蔭参りの狂乱の様子を揚げていたのだが、近年になって、慶応三年に京都でええじゃないかを実際に目撃した絵師の前川五嶺が「実景として描いたこの図」に替わったのだ。

二十年ほど前までは収蔵庫の中でほぼ眠っていた絵巻を掘り出して展示紹介した筆者なので、日本史の教科書に載るなんて「出世したなあ」との感慨が深いが、考えてみるとなぜ教科書にこれが載っているのか。もっと違う場面でもいいはずだ。例えば二条城での大政奉還の場面とかの方が筆者には重要だと思うが、載っていない（明治以降の歴史画しかないからか）。

思うに「歴史とは民衆が動かすものだ」というマルクス主義的歴史観に合致するのがこの「ええじゃないか」だからであろう。教科書では「慶応3年、東海・畿内一帯の民衆の間では、熱狂的な「ええじゃないか」の集団乱舞が発生し、この「世直し」を期待した民衆運動は幕府の支配秩序を一時混乱におとしいれた」とある。

息詰まる封建社会への鬱屈を集団乱舞で晴らそうとする民衆の姿こそが「より正しい歴史だという歴史観」が教科書に採用された根本にあるだろう。歴史を龍馬のような個人に焦点をあてて記載するのではなく、百姓一揆・ええじゃないか・米騒動・安保闘争など民衆運動を重視して書くべきだとの思想だ。その中でも教科書に載せるのに穏当なのがこの「ええじゃないか」だ。逮捕者などが出なかった歴史事象だからだ。集団乱舞で時代の一新を求めた民衆の姿という評価であろう。

高校時代に「山川の日本史」で学んできた者が教科書制作の裏側を想像するなんて。それもまた感慨が深い。

前川五嶺筆「ええじゃないか図」部分
（『近世珍話』慶応三年　京都国立博物館蔵）

“話してみるかよ”

龍馬の許婚（いいなづけ）「狂人」
千葉佐那(2)

石川　明美（山梨龍馬会甲斐援隊 会長）

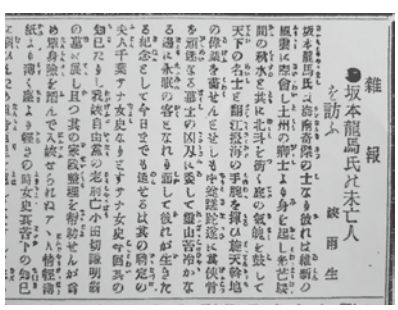
千葉さな子に「おまえは狂人だ」と言ったのは父定吉です。さな子のイメージからは程遠い言葉です。

明治26（1893）年8月、山梨県甲府市の小田切謙明宅にさな子が滞在した時、山梨日日新聞記者・山本節のインタビューを受けました。同月22日付の記事「坂本龍馬氏の未亡人を訪う」の中で3度にわたり、さな子は自らを「狂人」と語っています。

記事によると、父千葉定吉がさな子に嫁ぐか別家して夫を迎えることを勧めたものの、時代は乱れ、英傑は剣を持って立ち、国のため血を流そうと構えている様相。さな子も身を持って国に尽くそうと思っており、結婚など考えていませんでした。そのため、定吉は「おまえは狂人だ」と大声で言うようになったということです。

本文を要約すると、『坂本龍馬氏が、彼女（さな子）の父君に妻にしたいと求めた。父君は「家の娘は狂人なのを良く知っているはずだ。だがあなたが狂人を嫁にする気があるなら拒むことはない」として、さな子にそのことを話した。彼女に強いたわけではない。彼女は父君の命に従い、「天下が鎮まるのを待って結婚式を挙げたい」と言った。父君も坂本氏も「それでよい」と言うことになった。彼女（の年）は21か2』。

坂本龍馬、千葉定吉、さな子の声が聞こえてきそうな記事です。狂人・狂った人は言い過ぎですが、動じない人だったと感じます。今、千葉さな子は山梨県甲府市朝日町「清運寺」小田切家の墓地に眠っています。



雜　報

坂本龍馬氏の未亡人

訪ふ　紫雨生

千葉さな子のインタビュー記事
＝明治26年8月22日付　山梨日日新聞

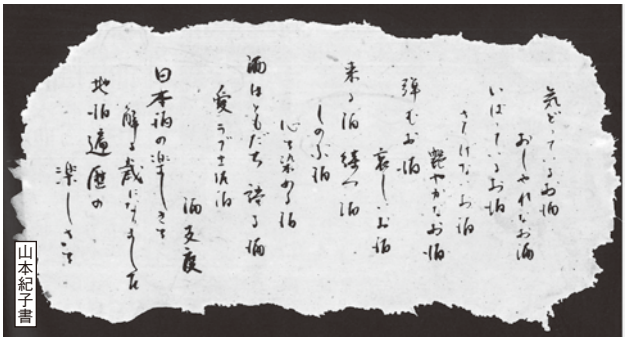
コラム・龍馬のこと

四万十で、龍馬のごとく

山本　紀子（『無手無冠』酒造・取締役）

「走れ、走れ、龍馬のごとく駆け抜けよ!」
同志社大学アメリカンフットボール部の同輩が贈ってくれた
御養子さま（夫）へのメッセージ。
山本家三代女系家族の蔵元に婿入りした中村彰宏さま。
酒が飲めるぞ、酒が飲めるぞ、酒が飲めるぞ。五十四年前お見合い結婚。酒が好きだったばっかりに斜陽産業の蔵元の跡継ぎに・・・
「オンシャー（お前）は関係ない。おらぁ酒に惚れたがよ」。
4年前に旅立つまで愛の囁き一切なし。四万十の『ダバダ火振』栗焼酎を世に出し、百年ぶりに男子四人の子孫を残し山本家を守った。
龍馬さん。京都の最期のお酒はどんな味?
龍馬は軍鶏鍋、愛しの夫は鯨肉好き。
「オンシャーばあ酔うたんぼ（酔っ払い）に
寛大なおなご（女）はおらざった」と宣うた。
愛すべき酔っ払い様と一度、泥酔してみたかった。
四万十の龍馬、男の中の男。
わが人生薔薇色じゃった。

生涯酒を愛した山本彰宏



山本紀子書

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp